

## ◇中国の神話と古代史

前漢初期につくられた『淮南子』に、天地開闢の神話が記されている。

「昔、天も地もなかったとき、世界は真つ暗闇で、形あるものは何一つなく混沌としていた。その中から、二神が生まれ出た。陰陽の二神で、天地の創造に苦勞していた。やがて、陰陽が分かれて八方の位置も定まると、陽神が天、陰神が地を治めることになってこの国ができ上がった」

この天地創造の神として、『山海経』は人面蛇身の鐘山なる神（燭龍）をあげている。

「北方に鐘山という山があった。その山上に人の顔にそっくりな石の首があった。石の首には二つの目と一つの口があり、左の目は太陽、右の目は月を表していた。左右の目は代わる代わるに開き、左目が開いている時は昼、右目が開いている時は夜であった」

伝説から天地創造の神を探すと、竜犬から人に成り代わったとする盤古がいる。

「混沌とした鶏卵のごとき中から、陰陽に感応して盤古という巨人が生まれた。その一万八千年後に天と地が初めて姿をみせると、盤古は死に絶えて天と地の万物に化した。即ち、息は風雲に、声は雷に、左目は太陽、右目は月、毛髪は草木、手と体は山、血は河、肉は土、汗は雨となった」

『史記』を書き上げた司馬遷は、中国の歴史を五帝期から書き起こして、夏、殷、周に続くとし

た。五帝期とは、熊の化身とされる黄帝から堯・舜へと続く五代の神国（神仙の国）時代を言い、神代の真つ只中にある。その黄帝は地の神として中国全土を治めた最初の帝王、堯・舜も至上の徳治を実現できた聖王として称えられてきた。ついで仁徳のある禹が洪水を鎮めた功績により、舜から跡を託された。

では、黄帝はいつ頃の人なのか。周王朝の成立が前一〇五〇年頃、殷王朝の成立は前一七五一年、夏王朝は禹を除いて十三代四七二年も続くことで、それは夏王朝の成立から百年ほどさかの

ぼった前二三〇〇年代の中ごろ、つまり今から四三〇〇年あまり前という計算になる。

『史記』「三皇本紀」（唐の司馬貞が加筆）や仙話によると、五帝期以前には、雷沢（山東省）で生まれた伏犧（秦皇）と女媧、それに烈山（湖北省）から興った炎帝の三皇がいたとされる。伏犧と女媧は上半身が人間、下半身が蛇の姿で描かれている。伏犧は風姓で、竜が現れ出る瑞祥があったことから竜の字を官名に多用した。彼は文字をつくり、婚姻制度を立て、網を使った漁獵や牛・羊・豚の飼育を広めたという。陳（河南省）に都した際、泰山に登って封祭を成し遂げた。雲南に住む苗族は、古くからの神話の中で、

「先祖はかつて洞庭湖北の荊州に住み、伏犧と女媧を祖と仰いできた」と伝える。その風俗が一昔前の日本のそれに似ていることは、皆の知るところだ。

火神で太陽神の炎帝（神農氏）は陳に都して、一門の祝融ともども南方の苗族を治めていた。官名には火の字を使った。彼は五穀の種をまいて収穫したり、市を開いて商売するなど活きる手立てを民衆に教え広めたという。また、自らの舌で薬草の効用を確かめつつ病気の治療に当たったことで、農耕神・縁日の守り神・医薬の神として崇敬されてきた。八卦を重ねて六十四卦をつくったのも彼だ。その姿は、牛頭人身、時には牛頭天王とも呼ばれた。

一説によると、神農氏と黄帝は世界を二分して治めていたが、結局は阪泉の野で雌雄を決する羽目になった。結果、地の神で公孫氏と称する黄帝が、同じく地の神で鬼国（幽冥界、黄泉国）



伏犧と女媧

の支配者だった后土（共工の児）を率いて神国をうち立てた。以後、伏羲や炎帝の子孫は、地の神を最高神として崇めることになる。

黄帝は自らの国を中つ国として、東西南北四方に四人の天帝を配して国邑の安泰を図ってきた。南の天帝は苗族も治める炎帝一門であり、その領域は長江の中・下流域に及んでいた。

西の天帝は、白帝と称して関中（渭水平原）を統治した。北の天帝となった后土は、幽都（北の都）に留まって北方を統治する一方、死者の魂が寄り集まる鬼国（黄泉国）も鎮撫した。この一門は死者が黄泉国に赴く際の葬送儀礼に加えて、天文地理や神仙術も司ったという。

古来、中央の元は大地でその色は黄、東西南北の元はそれぞれ木・金・火・水で、色は青・白・赤（朱）・黒に当てられたことで、この時代は五帝時代、自身も黄帝と称した。

黄帝の妻の一人だった皇娥は、天上の仙女として天宮に住み、日夜、機織りに精を出していた。ある日、彼女が疲れを癒そうと水辺に降り立つと、白帝の子と称する若者と出会って心を通わせた。二人の間に児ができた。成人したその児は、東方に鳥の王国を立てて東の天帝に昇った。そのまた児が渤海の東海上に乗り出して帰墟なる最果ての島々に渡り、海神らを従えて神仙の国（神国）を立てた。

☆仙話によると、東の海上には、かつて五つの神山が漂いながら浮んでいたが、その二つは北海に流されたり、水没するなどして蓬莱・方丈・瀛州の三神山だけが残ったという。

あるとき、黄帝は黄竜や巨大なミミズが現れる土徳の瑞祥があったことで、泰山に登って封禪を果たした。その後は、天上の天帝（上皇天帝、上帝）も兼ねたと称して地上と天上の両世界を治めていた。それは、黄帝と彼の臣下である天つ神らがさも雲の上に居るごとく振舞いながら、地上の国々に天命を下すという国体を装っていた。その就任時に景雲の瑞祥があったことから軍

隊を雲師うんしと名づけ、官名・地名にも雲の字を多用した。

こうして不死身となった黄帝は仙人の仲間入りも果たすと、崑崙山（黄河源流にあつて、不死の仙女西王母の住むという聖山）に莊嚴華麗な地上の帝都を設け、暇を見つけては天上から降つてきて浮世の仙人らと神仙遊びにふけていたという。

黄帝が崩ずると、孫の高陽（黄帝次男の兄）が立った。高陽が崩ずると、ひ孫の高辛（黄帝長男の孫）が帝嚳として立った。次に立った堯（帝嚳の兄）は、才能ある人を見つけて官職につけ、これを百官の制度に高めた。また、天文を司る官に天体の動きを観測させて一年を三六六日と定めるとともに、三年に一回の閏月を設けることで四時を正した。さらに春分・夏至・秋分・冬至の日を突き止め、種まきや収穫時期を見定めて教え広めたという。

彼は帝王だったにも関わらず質素な生活を守り通した。また、いかなる相手に対しても見下したり、侮ったり、驕ったりしなかったことで、その仁徳は天のごとく万物に行き渡り、知は神のごとく隅々に及んだ。人々はひまわりが太陽を慕うごとく、彼の徳になつた。

ついで、庶民出身ながら堯の跡継として立った舜は、天下を十二州に分けて治水に励み、水害の防止に努めてきた。また刑罰を公示してその施行に際しては、公平で情状あるものとした。即ち、酌量すべきは刑をゆるめ、微罪の者は罰金刑に処し、過失や災難による罪は赦免する一方、奸智にたのんで罪を重ねた者に対しては厳罰に処した。その運用に際しても、「慎重に、慎重に。刑は本人にとって重大事であるが故に」と厳に戒めてきた。

そうした時に、大雨が降り続いて大洪水が起こった。この時、舜は配下の禹や、后稷（農業大臣）の職にあつた棄（周の祖）に命じて水流を東の海に注がせ、国土を水害から守つたという。

その後も、禹は沢に堤防を築いたり、全土にわたって道路を通すなどした。さらに后稷ともど

も物資の流通を図ったり、余った食料を足りない所に回すなどして国民生活の均等化に努めた。禹はこの功績によって舜から跡を託されると、黄帝や舜に倣って聖山を巡り歩き、天や山河を祀って回った。道々、水路・道路・田畑の整備を押し進めながら、産物のでき具合を調べては貢物の種類や分量を定めたとされる。

かくして禹が天下と定めた九州（冀州、兗州、青州、徐州、揚州、荊州、豫州、雍州）は、等しく治まった。そこで舜の児・益に政治や事後を託したが、不運にも巡行中の会稽で逝った。その益も三年の喪が明けると、禹の児・啓に位を譲って箕山に隠棲した。この啓が神代と別れを告げる形で夏王朝を開き、世襲制にもつていくのだ。

#### ◇夏の時代（省略）

#### ◇殷（商）の時代

日清戦争の終わった数年後に、安陽県の小屯村から多数のト骨が発見された。よく調べてみると、その表面に無数の文字が刻まれていた。北の台地からは、殷の宮殿跡らしき版築の基壇も見つかった。その北郊には住居がなく、盛り土のない墓が点在していた。墓室は地下深くにあつて、そこから豊富な副葬品が出た。

ト骨の文句と口伝えの伝説が概ね一致することも分かった。これと発掘結果から、殷人の慣習や考え方が次第に明らかになった。即ち、基壇（先祖の墓）の上に木造の祭殿を建て、その屋根を茅や板で葺いて千木を立て、床には板を張って、日本人と同じく床上に坐って暮らしていた。国政にあたっては、何ごともト骨で神意を占う術や神がかりする鬼道、つまり先祖にお伺いを立てることで祭政一致を押し通してきた。この時代、王も王族も先祖に奉仕する世襲の神官、即ち

巫師や巫女だった。

古来、殷王の先祖は天帝から地上の統治を任されて天降った天子とされ、その都・商は天子の住まう天の邑まちと呼ばれてきた。先祖祭祀に明け暮れる大勢の殷人たちも、

「自分たちの先祖は、天から降って来て子孫を残し、再び天上に戻った。その霊は、時おり、神殿の千木を伝って舞い降りて来る。我ら滅後の靈魂も、天に昇って先祖と一緒に暮らすことになる」と信じきっていた。彼らは祖霊を畏敬するあまり、

「この世で起こる全てのいきごとは、天上に住む祖霊の意思によって決まる」という宿命観にこり固まっていた。そのため些細なことでも、卜骨で神意を占ったり鬼道を使うなどして祖霊にお伺いを立てた。鬼道とは、巫師や巫女がその身に先祖の霊を呼び寄せ、神がかり状態になってそのお告げを伝える呪術の一種で、口寄せとも呼ばれる。

殷人は泥酔した状態にあっても霊が乗り移ったと見なしたことで、お告げを得たい一心から所かまわず酒を深飲みした。そのため、この頃の青銅祭器の多くは酒器だった。

#### ◇周の時代

前十一世紀、殷の紂王は東夷の富や奴隷を手にしようとして、東の山東方面へ遠征に出かけた。この時、周の文王（季歴）は、殷のやり口に憤慨して天下を奪う決意を固めた。だが、志を果せぬままに逝ってしまった。その児の武王（昌）は父の家督を継ぐや、「天に代わって殷を討つ」との大号令を発して四万五千の兵とともに函谷関を越え、火徳を表す赤旗をなびかせつつ殷都に迫った。道々、諸侯らが合流してきて十倍もの軍勢に膨れ上がった。

対する紂王は金徳を意味する白旗を掲げながら、七十万の将兵と共に待ち構えていた。ところ

が、殷軍の大多数を占める奴隸兵たちは自分たちが解放されることを願って矛を逆さに持ち、武王のつき進む道をさつさと開いた。武王の大軍がそこを駆け抜けると、紂の本軍はあっけなく崩れた。

周祖は熊化身の黄帝とされるが、実際は太陽（日）を祖霊として崇め、熊を神聖視する蒙古系の遊牧民だったようで、いつの頃か黄河上流域に移住して神国中つ国の傘下に潜り込んでいた。その後、部族王の棄が五帝や夏の農業大臣（后稷）に就任したのをきっかけに、国を挙げての農耕に取り組んだ。その結果、数代後には豊かな農業国に変身することができた。

それからの周王は、この教えをひたすら守って農民を国の宝として大切に扱い、農業中心の国づくりに励んできた。周王自身も質素・礼・勤勉・施し・耐乏の精神を尊んで儉約に努めた。周はこの徳行を幾代にも渡って積み重ねた結果、多くの味方を得て殷を倒すことができた。

周王朝を開いた武王も、建国の二年後に逝った。その幼な児が成王として立つと、殷の後見役に就いていた周の王族や、山東半島から淮水にかけての殷民・東夷らが挙って反乱した。成王の叔父として摂政にあたった周公（旦）は、山東半島に遠征してこれをことごとく鎮圧し、あわせて二百余国を従えるほどに国土を広げた。

たさい 太宰（宰相）であった彼は、周都と殷本拠の中間辺りに副都・洛邑（洛陽）を設けることで、東方に広がった諸国をくまなく統治できる体制を築き上げた。

彼はこれを押し進めるにあたって、殷の統治制度つまり部族連合による統治を引き継ぐ一方、周の国情にあった周礼・長子相統制・封建制・諸々の官制を新設して王室の礎を固めた。

この部族連合は如何なるものだったのかというと、殷人らは部族ごとに城壁で囲った邑（都市国家）をつくり、祭政一致の下で暮らしてきた。そうした邑が結集することで、殷の国は成り立

っていた。地理的に言うと、殷都とその周辺地域は殷人や臣下らの邑で固められていたが、そこから一步外に出ると、異民族の邑が混在していた。殷都から離れるほど、異民族の割合も増えた。殷はこれを束ねる手段として、婦・子・侯・伯・亜・男・田・方なる爵位を各部族の長に与え、上級の諸侯に下級で小さな部族の亜・男・田・方を統率させる方法で、殷王朝に定期的に朝貢してくるように仕向けていた。

周はこれを真似たのだ。周と殷の制度の違いは、周が華北平原の要所要所に新たな邑をつくって周一門や功績のあつた臣下らを公・侯・伯・子・男に爵位分けして諸侯として封じ、所領を世襲させたことにある。

諸侯となる者が赴任に先立って受ける策命の儀式や、諸侯が周室に朝貢すべく参内した際には所領安堵や栄誉の印し、または恩賞として弓矢・戦車・衣服などが下賜された。その時、それまでの周室に対する功労が褒め称えられ、今後とも周室に怠りなく仕えるべしとの詔が下された。

対する諸侯は周室に忠誠を誓うとともに、玉器を奉じる礼でもって応えた。その意味するところは、諸侯が産物を定期的に献上したり、異民族との同化に努めたり、王城の築造・国境の警備・土木事業にあたりたり、非常事にあつては周王の命じるままに出陣したりすることにあつた。

この任を最優先させた周分家や諸侯の政治は、卿・大夫・士からなる三階級の貴族に委ねられてきた。政を取り仕切る宰相は卿から、外交を担う官吏は大夫から選ばれた。

周分家はこれら直臣を率いて所領に居住しつつ、周室の主宰する宗廟祭に欠かさず出席して宗族としての威厳を見せつける一方、異民族の社稷（土地の神と穀物霊）を合わせ祀って、同化に努めてきた。言葉をかえて言うと、周の外婚制度に沿った形で、異民族との血縁関係を深めて溶け込んで行き、周の支配体制がより強固になるようもつていったのだ。

わが国に興ったどの王朝も、環濠で囲った集落を要所要所に設けて一門や忠臣らを策封するこ



とで、周王朝とよく似た統治制を押し進めたに違いない。

殷から周の天下に移り変わっても、殷の文化や伝統が消え去ったわけではない。周は家訓にそぐわない殷の悪弊を遠ざけたものの、殷の優れた伝統や先進文化に対しては率直にその価値を認めて、これを摂取することに努めてきた。

周が殷から引き継ぐ伝統としては、統治方法・青銅器による先祖祭祀・文字・遺骸の納棺、青銅器や朱の副葬がある。一方、敬遠した風習には、殉葬・宿命観・鬼道・酒の暴飲がある。

周の伝統的な先祖祭祀も、殷のそれとは大きく違っていた。代々の周王は太陽（日）を祖霊の化身と見なす蒙古系伝統を守り通して、祀りごとの場では先祖の偉業を称え、先祖にひたすら願いごとを祈願してきた。新王朝の始まる成王の時に初めて郊祭し、伝統的な先祖祭祀に天神信仰もつけ足した。その結果、文王は周王朝の礎を築く皇祖、武王は王朝を開く皇宗、后稷の職にあつた棄は農業を手がけた功績から農耕の天神として宗廟に祀られ、秋になると新穀が奉げられた。

#### ◇春秋・戦国・秦の時代

前七二二年から前四八一年までを春秋時代という。この間に二百前後もあつた小国は、十数カ国に統合され、斉・晋・楚などが生き残りをかけて争った。

前五世紀、さらに国が統合されて、斉・燕・楚・秦・韓・魏・趙が生き残った。この七国が覇権を争った末に、前二二一年に秦が天下統一を成し遂げた。この間を戦国時代という。



春秋末期に呉越も支配した楚は、にわかには台頭した呉に敗北し、はるか西の都に都を移した。

前五〇〇年ころになると、中国では食うか食われるかの戦国時代が始まった。周公にあらがれた孔子が魯国で周政治を再現すべく試みたのも、悟りを開いた釈迦（仏陀ゴータマ）が鹿野苑や祇園精舎で弟子たちに説法していたのもこの頃だ。

前四九四年、太伯につながる呉王夫差が越王勾踐率いる大軍を打ち破った。勾踐は兵五千と共に会稽山に立てこもったが、逃げる隙間もないほどに包囲された。進退窮まった勾踐が平身低頭して和睦を願い出ると、夫差は臣下の反対を押し切って和睦を許し、兵をさっさと引き上げた。

☆夫差は、荊蛮の千余家に担がれた太伯が自国を句呉こごと称して以来、二〇余代目にあたる。

前四八九年、夫差は、斉では景公没後に大臣らが権勢を争っていると聞くと、北に出兵して艾陵がりよう（山東）で斉を叩いた。その後も斉に留まって、斉や魯の南方を攻略した。

前四八二年春にも北に軍を送り、黄地（河南）で諸侯らと会盟した。中国の覇者となって、周室を安泰せしめたいと望んだからだ。このとき、呉軍の精鋭はあらかたが夫差に随行して、残る老人・婦女子が太子と共に留守を預かっていた。

勾踐はその隙を突いて、水軍二千・訓練の行き届いた兵士四万・近親の武士六千・近衛兵千を総動員して呉の都に不意打ちをかけ、太子を殺害してしまった。

前四七八年、越はまたも呉に大勝してその都を包囲すること三年だった。

孔子の死から六年後の前四七三年、越軍はついに呉の都を落とした。勾踐は呉の国内を隅々まで平定すると、大軍と共に淮水を渡って斉・晋の諸侯らと徐州で会合し、ついで貢ぎ物を周室に献上した。周の元王は使者を遣わして勾踐に胙ひちんを賜い、覇者の称号・侯伯を与えた。

その後も勾踐は、楚に淮水地方を与えたり、宋には呉が侵略した宋の旧領を返してやったり、魯

に対しても泗水の東、方百里の土地を分与するなどした。この時期、越軍は長江や淮水の東を自由に行き来できたことで、諸侯らは越王勾踐を慶賀して霸王と称えた。

六代後の越王無疆も北に進軍して斉を攻め、ついで西の楚を伐つて中原の諸侯と覇権を争った。前三三四年、彼は再び北上して斉を伐とうとしたが、翻意して楚の討伐に向かった。楚の威王はこれを迎え撃つて越の所領をことごとく奪った。

解体の憂き目にあつた越一門は、互いに小国を立てて相争い、ある者は王、ある者は君と称して長江南の海岸地域に割拠したが、いつしか楚に入朝して臣下に成り下がっていた。

越の所領からはじき出された一門や沿岸住民らも、広東・安南の海沿いに散つて行く他なかった。その後、西の辺境にあつた秦が中央集権化と工業化に力を注ぎ、最強国にのし上がってきた。

残りの六国は秦の膨張を食い止めようと連衡や合従を繰り返したが、秦王は前二三〇年に韓、前二二三年に楚、前二二二年に燕、続いて前二二一年に斉を滅ぼして天下統一を果たした。

秦王政は史上初めての統一国家を築くと、全国を三六郡に分ち、その郡をいくつもの県に分して、郡には守なる行政長官と尉なる軍政長官、県には令なる官職を設けた上で、中央から郡や県に官僚を送つて中央集権化を押し進めた。次に、自ら封禅して始皇帝と称していた。

前二一〇年、その始皇帝が急死すると、反対派が一気に勢いづいた。楚国から立ち上がった項羽と劉邦が秦を倒し、まずは項羽が覇者に立った。しかし、五年後の前二〇二年、人気のある劉邦（高祖）が垓下の一戦で項羽を破つて漢という国を興し、ついで臣下に担がれる形で皇帝の座に就いた。

高祖は長安に都して、郡県制など秦の考案した制度や法律を引き継ぐ一方、大手柄を立てた臣下らを諸侯に封じたり将軍に取り立てるなどして封建制も併用した。